

巻頭言

危機を乗り越える組織作り

奈良女子大学総合情報処理センター長

加古 富志雄

この度の東日本大震災により、多くの皆様が、これまで想像もしなかった危機に直面されたことと思います。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。いまだ危機が終息したのではなく、更なる災害の発生を防ぐための努力が現在も続けられている状態であります。また、東海から南海にかけてのトラフを震源とする大地震の発生も予測されており、これによる被害はさらに甚大な規模になると予想されています。

このような中であって、情報系センターの皆様方に置かれましては、計算機やネットワークという教育や研究、さらには大学運営の基盤を支えているインフラの維持、管理といったこれまでの業務に加えて、災害発生時にどれだけの機能を維持するか、またどのように復旧させていくかについても考えていくことが求められています。

現在、多くのセンターでは、予算の削減や人的資源の不足といった問題を抱えながら、日々の業務に携わっておられると思います。組織の統合によって無駄をなくして、インフラを維持していくかに腐心されていることと存じますが、これは、別の見方をすると、非常時のための安全係数を限界まで小さくするということであり、非常時にそなえて予備を取っておくという方向とは逆の方向性である。今回の大震災では、想定される災害に対処するだけでは十分ではないということが明らかになり、今後は想定以上の災害が発生した場合の対処も考慮していくことが求められています。

このような、大災害に対処し、そこから発生する危機を乗り越えるための組織をどのように構築・維持していくかということがセンターとしての一つの大きな課題となります。これは、個々のセンターの努力だけでは対応することが非常に難しい問題です。大学の情報系センター間で連携を取り、共同で危機を乗り越えていくための組織ならびに人的体制の整備に取り組んでいくことが必要でしょう。

国立大学法人情報系センター関係者の研究発表と情報交換の場である学術情報処理研究集会も15回目を数えるようになりました。本誌「学術情報処理研究」が、情報系センターに課せられた課題を解決する一助となり、その重要性を増していくことを期待します。